

カリフ制再興

Re-establishment of the Caliphate

未完のプロジェクト、その歴史・理念・未来

Hassan Ko Nakata

中
田
考

書
肆
心
水

序 アナーキズムとしてのカリフ制 17

1

カリフとは何か——正統四代カリフとカリフ制の基礎 24

- 1 カリフの語義 24
- 2 アブー・バクルのカリフ就任 25
- 3 アブー・バクルのカリフ就任に対するアリーの反対 28
- 4 リッダ（背教）戦争 30
- 5 カリフ制成立 32
- 6 正統カリフ 34
- 7 預言者の後継者としてのアリー 36
- 8 カリフの別称 38
- 9 クルアーンにおけるカリフ 41
- 10 ハディースにおけるカリフ 43

2

イスラーム学とカリフ——神学と法学の諸相 48

1	アラビア語とイスラーム	48
2	イスラームにおける「学知」	50
3	神学におけるカリフ	53
4	古典カリフ論の定礎	56
5	カリフの職務	58
6	カリフ制の法学への組み込み	61
7	イブン・タイミーヤとシャリーアによる統治	67
8	イブン・タイミーヤと万人参加政治	75
9	イブン・タイミーヤと使徒の後継者としてのウンマ	80
10	クルトウビーと神の代理人としてのカリフ	83
11	預言者の相続人としてのウラマーウ	85
12	イスラーム学界におけるカリフ論の現在	89

3

カリフ制の歴史的変遷——王権とカリフ制の並存

1	正統カリフ時代と分派の誕生	92
2	カリフ制から王権制へ	96
3	ウマイヤ朝（六六一―七五〇年）	98
4	アッバース朝（七五〇―一二五八年）	100

5	バグダード・アッバース朝の実情	103
6	後ウマイヤ朝（七五六一―一〇三一年）	106
7	ファティマ朝（九〇九―一二七二年）	107
8	カイロ・アッバース朝（一二六一―一五二七年）	109
9	オスマン朝（二九九―一九二二年）	111
10	サファヴィー朝（一五〇一―一七三六年）	113
11	イバード派とザイド派	114
12	オスマン朝カリフ制滅亡に至るイスラーム世界の状況	116

4

現代イスラーム運動——カリフ制再興への胎動

1	汎イスラーム主義の失敗	119
2	ヒラーファト運動	120
3	アリー・アブド・アル・ラズイクとラシード・リダー	122
4	ワッハーブ派	124
5	イスラーム改革主義	128
6	サイイド・クトゥブ	130
7	解放党	133
8	ワッハーブ派の人定法批判	138

カリフ制再興の現在

5

——イスラーム国の歴史的位置

164

- 9 サラフィー・ジハード主義の革命のジハード論 141
 - 10 イラン・イスラーム革命とシーア派 145
 - 11 アル＝カーイダ 147
 - 12 ムラービトゥーンとディーナール金貨 151
 - 13 自称カリフたち 154
 - 14 「9・11」からイスラーム国の成立へ 158
-
- 1 カリフ制は再興されたのか 164
 - 2 イスラーム国とアブー・バクル・バグダーディ 167
 - 3 グローバリゼーションとイスラーム国 174
 - 4 なぜ二〇一四年にイスラーム国は樹立されたのか 177
 - 5 真のグローバリゼーションとしてのカリフ制 181
 - 6 カリフ制再興の先駆けとしてのイスラーム国 187
 - 7 イスラーム国への批判 190
 - 8 なぜイスラーム国が成立したのか 194
 - 9 イスラーム国樹立からカリフ制再興へ 200

6

カリフ制再興の文明論——未完のプロジェクトの潜勢力

204

- 1 来たるべきカリフ制 204
- 2 カリフ制の「世俗性」 206
- 3 カリフ制の反全体主義 210
- 4 法の支配としてのカリフ制 213
- 5 比較文明論から見たカリフ制 216
- 6 カリフ制と国家への隷属 220

エピローグ カリフ制と人類の未来

222

あとがき 232

索引 252